

## 特集：哲学者にならない人々のための哲学教育

### 趣 旨

哲学研究者は、哲学の専門家になるための教育しか受けたことがない。西洋古典語と近代諸語を学び、哲学史のおおまかな流れを理解した上で、過去の「偉大な」哲学者のテキストを精読する。テキストに見いだした微妙な齟齬を問いの形に再構成し、テキストを合理的に解釈し直すことによってそれに答える、それを、論文という形式で発表する…といった手順を上手に遂行するためのスキルを哲学研究者は、あまり体系だったとは言えない仕方で、伝授される。哲学者の卵たちに、こうした教育を繰り返すのでよいのか、という問題はそれとして考えていかねばならない。つまり、哲学専門家の再生産をどのように行うべきか、これからの哲学専門家に求められる資質とスキルは何か、といった問いである。

しかし、本特集ではそれとは別の、もうひとつの大きな問いに焦点を絞ることにしたい。すなわち、哲学者にならない人々のための哲学教育はいかにあるべきかという問いだ。大学に職を得て、あるいは非常勤講師として教壇に立つことになった哲学研究者がまず直面する問いは、「この学生たちに哲学の何をどう教えたらよいのか」という問いである。目の前の学生は、おそらく哲学に特段の関心はない、そしてこれが教室で哲学を学ぶおそらく最初で最後の機会になるはずだ。とするなら、この授業で彼らの哲学に対する印象と評価は決まるはずだ。哲学を愛する者のはしくれとして、彼らに何をつかんでもらえばよいのか。この問いに頭を悩ませなかった哲学教師はおそらくいないだろう。

こうした問いは、どんな学問分野にもついて回る問いだ、ととりあえずは言える。しかし、哲学に関しては、この問いにもう一つのひねりが加わる。というのは、哲学は、「哲学とは何か」あるいは

「哲学的思考とは何か」をその最重要の論題の一つとしてつねに掲げてきた、という点ですぐれて反省的な営みであるからだ。優れた哲学がつねに反＝哲学の様相を呈するというのが、哲学という分野の特殊性だと言えるだろう。そうすると、この一期一会の機会に哲学の何を教えればよいのかという問いは、必然的に哲学の本質（もしあれば）は何か、というそれ自体哲学的な問いにつながっていくだろう。哲学教育の問題をたんに哲学の応用、ないし周辺領域の問題と片付けられない事情がこうして生じる。

われわれは、名古屋圏の哲学研究者を中心に、2008年に「FD・SD コンソーシアム名古屋」の中に「名古屋哲学教育研究会」を立ち上げ、これらの問題を議論してきた。とりわけ、名古屋大学高等教育研究センターの支援により、これまで4回の公開セミナー「哲学を専門としない学生にどのように哲学を教えるのか」を開催し、非哲学者のための哲学教育のあり方について議論を進めてきた。本特集は、そうした活動の中間まとめの性格を持つものである。

多忙な中を執筆していただいたみなさんに、心より感謝申し上げます。本特集がきっかけとなり、哲学者自身が哲学教育について哲学的議論を深める機運がより一層高まることを期待している。

戸田山 和久